

Miyazaki Masahiro
宮崎正弘

テロリズムと 世界宗教戦争

徳間書店

宮崎正弘
MIYAZAKI MASAHITO

200
E381
665

テロリズムと 世界宗教戦争

Yaf75/11787

2002年1月23日

徳間書店

〔著者略歴〕宮崎正弘（みやざき・まさひろ）
1946年、金沢生まれ。早稲田大学英文科中退。
「日本学生新聞」編集長、雑誌「浪漫」企画室
長を経て、貿易会社を経営。国際ビジネスの経
験を生かし、82年に『もうひとつの資源戦争』
で論壇へ。以後、『日米先端特許戦争』などが
注目を集める。中東から中央アジアにかけて何
度も取材旅行を重ね、『湾岸戦争の嘘と真実』
などを発表、また、『中国大分裂』『人民元大崩
壊』『中国台湾・電腦大戦』など中国の舞台裏
を分析した著書のほか、『金正日の核弾頭』『謀
略投機』などの国際情報小説も手がける。最新
作に『風紀紊乱たる中国』『米中対決時代がき
た』。

テロリズムと世界宗教戦争

第一刷——2001年10月31日

著 者——宮崎正弘

発行者——松下武義

発行所——株式会社徳間書店

東京都港区東新橋 1 - 1 - 16

郵便番号105-8055

電話(03) 3573-0111(代表)

振替00140-0-44392

(編集担当) 明石直彦

印 刷——図書印刷株式会社

製 本——半七写真印刷工業株式会社

©2001 MIYAZAKI Masahiro, Printed in Japan
乱丁・落丁はおとりかえ致します。

☆徳間書店の好評既刊

人民元大崩壊

宮崎正弘

中国発「世界連鎖恐慌」の衝撃

世界が恐れる「人民元切り下げ」は、確実にやってくる！中国経済の破綻寸前の悲惨な状況を看破、不可避の通貨暴落が世界経済と日本にどんな衝撃を与えるかを詳説。

日本人のための宗教原論

小室直樹

日本人は宗教無知であるがゆえにその身を滅ぼしている。世界四大宗教たるキリスト教、仏教、イスラム教、儒教の急所を明確に示し、宗教の要諦を理解するための第一級解説書！！

井沢元彦の
世界宗教講座

井沢元彦

仏教、キリスト教、儒教、イスラム教、神道の五大宗教のエッセンスを比較することで日本人の精神構造をあぶり出す異色の文化論。「漢字」「穢れ」「言霊」などをキーワードに語る。

キリスト教
封印の世界史

ヘレン・エラーブ

井沢元彦^{監修}

杉谷浩子^訳

世界を支配し続けた西欧文明の原理は今なぜ崩壊しつつあるのか。基盤となるキリスト教「暗黒（タブー）」の歴史に初めて焦点を当てること、その衰退の原因を浮彫りにする。

世界の宗教
どの教えが優れているのか？

ジャンク・ケンジー
小林 修〔訳〕

とある王国で、どの宗教が一番優れているかを決定するトーナメントが開催され……。各宗教の教義を寓話形式でわかり易く説き明かし、(宗教版ソフィーの世界)と絶賛された話題書。

「脱アメリカ」が
日本を復活させる

ビル・トッテン

自由と民主主義の国・アメリカ——というのは偽り。実態は「弱肉強食のジャングル」である。そんなアメリカに倣うのは不幸の元だ。「脱アメリカ」の重要性をぜひ認識してほしい。

巨大大米を操るグローバルメディアの攻防
金融情報ウォーズ

小西 徹
田 淵 実穂

長銀破綻の裏では一本のメーブルが市場を操っていた！ 経済グローバル化とネットワーク進化で、経済は情報で動くように。それを伝える金融メディアの実態と情報戦争の裏側を！

人類は21世紀に
滅亡する!?

糸川 英夫

「真の豊かさ」への超発想

不況、食糧問題、人口爆発、民族紛争、高齢化現象……様々な難問をブレイク・スルーする方途とは？ 日本の叡知がポピュレーション理論などに基き提唱する、瞳目の提言。

イエス・キリスト
封印の聖書

サンダー・シング
林陽^{編訳}

本物の言葉だから本当に癒される。キリストと霊的交わりを果たした「最後の聖人」の教えとして数百万人に読み継がれてきた宇宙哲学——神・人・宗教のすべて。世界30カ国語翻訳。

騙される日本・巻られるアジアの裏側
「超陰謀」60の真実

ジョン・パンキン
ジョン・ウエイレン
石谷尚子^訳

ユダヤ「国際金融」陰謀説だけでは決して見えてこない世界支配エリートの実態！ 世界を揺るがす陰謀の数々をわかりやすく解説、「Xファイル」等各マスコミが絶賛した話題書！

世界を知るための
ささやかな哲学

アルベール・ジャカル
ユゲット・プラネス
吉沢弘之^訳

未来を見通す力をいかに養うか。これまでの〈世界〉〈私〉の見方が一変する科学と哲学の対話から生まれた新しき知の思考法を紹介！ フランスで大ベストセラーの「使える哲学」への入門書。

中国の核戦争計画

ミサイル防衛^{MID}、核武装、日本と台湾同盟の提唱

中川八洋

北朝鮮のノドン・テポドンより本当に恐いのは中国の核ミサイル。東アジアで始まった新冷戦の恐怖の構造を浮き彫りにし、核の選択も含めた究極の日本列島防衛論を提言する。

まえがき

☆全世界に衝撃を与えた米国の同時多発テロ

2001年9月11日、その衝撃の映像を世界中の人々が見た。

米国資本主義の繁栄を象徴する高層の摩天楼群が、イスラム原理主義過激派のテロリストたちが乗っ取り、「カミカゼ特攻機」と化した民間航空機の激突で木っ端微塵^{みじん}に破壊され、人々の目の前で崩壊してゆく。

110階建て、ツインの世界貿易センタービルは対岸のニュージャージーからも、JFK空港に降り立った瞬間にも遠望できる、まさに「自由の女神像」と並ぶニューヨークの象徴であった。

この史上最悪といわれるテロの黒幕として、事件から8時間後に名前が挙がったのがウサマ・ビン・ラディン。イスラム原理主義の超過激派であり、テロリストを自在に操る

「英雄」でもある。

ベールに包まれたその素顔についてはおいおい明らかにしていくが、ウォール街の中核でもあり、金融パニックを誘発するに十分な世界貿易センタービルへの自爆攻撃には、テロリストらの「思惑」も透けて見えた。

「金融恐慌」を狙っていたと思われるのは、直前にラディン一味が金融商品の先物予約（空売り）を行っていた事実からもわかる。

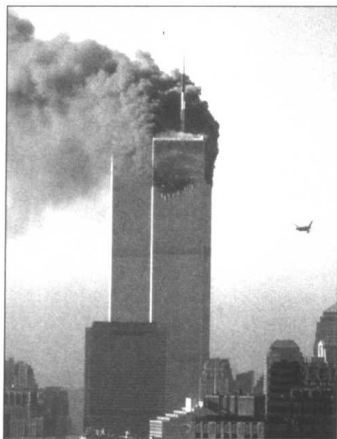
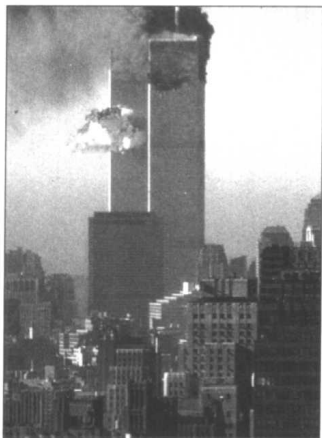
ウォール街が翌週に取引を再開したときは600ドル以上の暴落が演じられた。

それにしても高層ビルはなんと脆弱ぜいじやくであつたろうか。ワンフロア分の可燃物が燃える通常火災を想定すると、発生する熱量は190メガ・ジュール（メガは100万倍、ジュールは熱量の単位）といわれる。

ビルに激突した旅客機の航続距離からはじき出された推定搭載燃料が燃焼したときに発生する熱量は160メガ・ジュール。つまり飛行機の衝突で通常の火災に匹敵する熱量があつたのだ。

旅客機衝突の衝撃によって貿易センタービルの耐火被覆材がはがれ落ち、そこに揮発性の航空機燃料が瞬時に漏れ出して引火した。

全世界に衝撃を与えた米国同時多発テロ



2001年9月11日、テロリストにハイジャックされた2機の民間航空機がニューヨークの世界貿易センタービルに次々と突っ込んだ。上・左写真は2機目が体当たりする瞬間。



同日、同じくハイジャックされた民間機の自爆テロによって破壊されたワシントンの国防総省。

B4/BF57/02

温度が急速に上昇し、鉄骨の耐久性が失われて上層部を支えきれず、一時間前後でビル全体が脆くも崩壊し、それが周囲のビルにも広がり、たちまち米国の富の象徴だった場所
は廃墟と化した。

☆情報戦に致命的な手抜きがあった米国

ところで米国の情報機関は、事件の何日も前からアフガニスタンなどから米国へ潜入した、身元の怪しげな人間の何人かを追跡尾行していた。

マークされた男たちは3つ、4つのグループに分かれており、頻繁に外国を往復していた。しかし、米国の情報当局はそのうちの何人かの所在を事件の1週間前から把握できずにいた。

CIA、FBIばかりか、世界中の通信を傍受できる「エシユロン」を駆使する米国の諜報網が、テロリストの詳しい動きを察知できなかったのは後世に残る汚点となった。

著名な評論家のウィリアム・サファイアは「年間予算数百億ドルも使うCIA、FBIはいったい何をしていたのか」と「ワシントン・ポスト」で激しく噛みついた。

これぞ「真珠湾に匹敵する米国の新しい不名誉だ」と。

真珠湾攻撃をアメリカ人が比喩として用いるときは「油断した米国」の象徴を意味しており、とりたてて「反目」を意味してはいない。真珠湾の奇襲を許した油断と屈辱を米国は「インフラマイ不名誉」と表現するのである。

今度の同時多発テロは、真珠湾をしのぐ大惨事、ブッシュ大統領は直ちに「戦争状態」だと言った。

さりとて、米国諜報機関は情報収集をさぼっていたわけではない。実は、ラディン側が周到に工作した偽情報に振り回されたのである。

テロリスト側は「インド国内でのイスラム原理主義者によるテロ計画」という情報を6月から盛んに携帯電話やパソコン・ネットワークに流し、さも本物のように見せかけていた。

この情報をすっかり信用した米国はインド政府に連絡して、「犯行未遂」で何人かを拘束した。

「おとり罠」らは取り調べに対して韓国、日本、フィリピンなどでの米軍施設への襲撃計画を「おとり自白」し、それは9月6日だと言った。

1998年8月に起こったケニヤならびにタンザニアの米国大使館連続爆弾テロも彼らが行った「実績」があるため、米国は当該国へ通知し厳戒体制を敷いた。

日本でも9月6日を前に首相官邸、国会などが厳戒態勢に入っていたのだ。

しかし、9月6日はなにも起こらなかったため、緊張がゆるんだ。そのもつとも緊張が弛緩した9月11日に、米国の本丸が奇襲されたのである。

「犯行グループ」の中心がアフガニスタンのタリバン政権にかくまわれたウサマ・ビン・ラディンと、その下部組織「アル・カイダ」であることはすぐに分かった。日ごろから警戒してきたからである。

まして、パキスタンの情報長官が9月初旬にワシントンを密かに訪問しており、CIA長官も答礼で9月12日にパキスタン入りする予定だった。

つまり、米国は彼らが無差別テロを準備している動きを早くから掴んでいたものの、よもや民間航空機を「武器化」する奇襲で臨んで来るとは予期していなかったのだ。

事前に同盟国にも連絡して在外米国大使館は厳戒態勢にあったことは述べたが、これはと思われるテロリスト・グループへの「盗聴」もすすんでいた。

そして事件の翌日になって、エシユロンの会話記録にラディン一派の幹部が「大攻勢

（に出よ）」と、米国内のテロリストと喋^{しゃべ}っていることが判明した（「ワシントンタイムズ」9月22日）。

そうでなければ、事件後あれほどの短時間でボストンやフロリダの犯行グループの拠点搜索やドイツにおける容疑者拘束はできない。支援者を何人も逮捕し、隠れ家やホテルに踏み込んだのも事前の情報活動の「成果」ではある。

CIAはコンピュータ・ネットワークへの侵入にもっとも神経質に警戒していた。

「金融パニック」を引き起こすほどの大規模なテロを行うには、ネットワークを麻痺させることが第一と考えられたためだ。いまでも、この基本には変わりが無い。

テロリストの主役「アル・カイダ」とは、厳密に言えば残置諜者Ⅱ「草」のごときで、個人個人が秘密黨員のようにお互いに横の連絡がなく、しかし命令一下で訓練された部隊が編成される。

国家の壁を超えた「ヴァーチャル同盟」が組織され、既存の国家と対決するのである。正規軍ではないから、テロリストは謀略を駆使する。まさに中国の『三国志演義』の世界のように、あるいは日本の戦国時代における忍者のように「草」は世界中に散って、「そのとき」に備えていた。

半年以上もフロリダの飛行訓練学校へも通っていたし、ドイツに拠点を設けて準備していたグループもいた。その過程で彼らは最終目的を知らされていないし、テロリスト組織では、かつてのアブニダル・グループがそうであるように行動予定を雑兵が幹部に質すこともありえない。

そうした組織の厳格さが秘密を維持し、敵諜報機関を欺いたのである。

☆ABC兵器を駆使する新テロ時代の始まり

報復の軍事行動は米国単独の作戦ではないから、相当長引くことになるだろう。そしてテロリスト側の軍事行動は世界的広がりをもち、その秘密活動はさらに過激化してゆくだろう。

「21世紀型の戦争」は宣戦布告を伴わない、意表をつく戦術を行使し、予期せぬ方向からなされるだろうし、戦術もバラエティに富むかたちをとり、ABC兵器が使われるだろう。A（アトミック）、B（バイオ）、C（ケミカル）である。

I W（インフォメーション・ウォーズ）と専門家から呼ばれる新たな戦争形態は「目に

見えない」戦術に著しい特色がある。

ネタニヤフ前イスラエル首相は「今回のテロは新しい戦争の始まりに過ぎない」とし、「もしイランやイラクが核兵器を入手すれば数百万人が犠牲になるだろう」と指摘している（「エルサレムポスト」9月14日）。

だが国際的な包囲網は難しい。

ラディンのグループはいくつかの「班」に分かれており、アフガニスタンのほかドイツなどにも拠点を持っていた。それぞれが飛行訓練など役割を分担しており「細胞」同士の連絡はインターネットと携帯電話である。

コンピュータ・ウイルスによる攻撃を準備していた形跡もある。

武器も目を追うに従って「小型化」し、旧ソ連軍の横流しである「小型核」や「毒ガス」あるいは「細菌兵器」などといった持ち運びに便利で目立たない兵器を調達している。奇襲の条件とはこうした原則に立脚する。

オウム真理教事件から彼らは多くを学んだ。サリン効果を世界の過激派は「教訓化」していた。

これらの武器をテロリストに供与し、資金も供与してきた「ならず者国家」には、米欧

で学んだソフトウェア専門家が多数いる。

世界貿易センタービル、ペンタゴンなどへの同時多発テロは、文明論的に論ずれば、宗教戦争の色合いが濃い、「世界大戦争」への「始まり」にすぎない。

本書は未曾有の危機にさらされた世界を宗教のもつ歴史的淵源えんげんと過激派の思想的背景をも交えながら、これからのテロリズムと自由世界の対応を立体的に考察してみたい。

テロリズムと世界宗教戦争◎目次